

オーケストラ曲をヒントに、 音による《雷雨》の描写を 観察・想像してみよう！



内藤 晃

ないとう・あきら●ピアニスト・指揮者・作編曲家。東京外国语大学卒業。弾き振りを含む多彩な演奏活動のほか、「もっと深い音楽体験」を共有すべく、ユニークな発想でレクチャーや執筆を行う。主宰ユニット「おんがくしつトリオ」では、教育楽器によるエキサイティングなアレンジが話題となり、全国的に公演を行う。著作、校訂楽譜、録音作品多数。訳書にゲレヒ著『師としてのリスト』(音楽之友社、近刊)。

音空間で描く映像

「ミッキーマウシング」という言葉をご存じでしょうか？ 映画用語で、登場人物の細かい動きにぴったりシンクロさせて音楽をつけるやり方のことです。ディズニー映画で使われたので、このように名付けられました。最強の「ミッキーマウシング」の例は『トムとジェリー』で、猫のトムとネズミのジェリーがドタバタ追いかげっこを繰り広げるアメリカのアニメですが、こぶが腫れ上がる動きに上行ポルタメント、しっぽを振る動きにトリルなど、雄弁すぎるほどの音の演出を聴けます。

ここでは、映像の空間的な動きが、見事に音空間での

動きに置き換えられています。こうした手法は、元来、言葉やストーリーを持つオペラや歌曲の分野で伝統的に発展してきました。川の流れがアルペッジョの伴奏型で描写されたり、星の瞬きが高音域の同音反復で描写されたりといった具合です。フランス革命を経て、いわゆる「ロマン派」の時代が到来すると、目上の王侯貴族のお耳を快く楽しませるという使命から解放され、作曲家たちは自在に音で語り出すようになります。歌詞がなくても、タイトルを持つ器楽曲を書き、鳥の声を装飾音で模すなどの擬音表現だけでなく、空間と音空間をシンクロさせた連想の原理を駆使して、聴き手の脳裏にありありと映像を喚起させました。ブルクミュラー（1806-74年）のキャラクター・ピースも、とても映像的につくられています。

譜例1 ベートーヴェン:交響曲第6番「田園」Op.68
第4楽章 第19~21小節

譜例2 ロッシーニ:歌劇「ウィリアム・テル」序曲
第92~94小節

「雷雨」のオーケストラ・サウンド

ところで、ピアノは10本の指で広い音域をカバーし、一人何役も演じることができる万能楽器で、作曲家は、歌や室内楽、オーケストラなど、様々なスタイルをピアノ1台に担わせます。『雷雨』は、まず間違いなく作曲家の脳内にオーケストラ・サウンドが鳴っていたんだろうと思われる曲想なので、その響きを想像するのが先決です。想像の手がかりとして、嵐を描いた音楽を他の作品で見てみましょう。

ベートーヴェンの《交響曲第6番「田園」》Op.68

(1808年)は、各楽章に具体的なタイトルを付した画期的な交響曲で、第4楽章「Gewitter, Sturm (雷雨、嵐)」でまさに雷雨が描写されています。まず、遠くの雷鳴を思わせる ***pp*** の断続的な低弦のトレモロ。そして、爆発的な **Tutti** の ***ff*** で嵐へ(譜例1)。激しい風雨と雷鳴が、荒れ狂う弦やティンパニのトレモロ、管楽器の咆哮によって描かれますが、ここでは、不協和音な減七和音がただならぬ緊迫感を醸し出す中、トレモロが擬音的に雷を模しているだけでなく、その激しい動き自体が豪雨の勢いを連想させたり、第1ヴァイオリンとヴィオラの下降する音型が豪雨の降り注ぐ動きを連想させたりしています。雨足はいったん弱まり、遠くの雷鳴が続く中で、たびたび現れる突然の ***sf*** は稲光のようです(第41~44小節)。嵐は再び激しさを増し、トレモロで下降アルペッジオを執拗に繰り返す弦楽器群が、降り続く豪雨を示唆します(第78小節~)。

ここに見られるトレモロで動き回る弦、緊迫した減七和音、雷鳴のようなティンパニ、稲妻の閃光のごとく突然来る ***sf***などといった特徴は、ロッシーニの《**「ウィリアム・テル」序曲**(1829年)の嵐の場面にもそのまま当てはまるもので、嵐の描写法として音楽的に常套化していったことがうかがえます(譜例2)。

そして、『雷雨』を作曲したブルクミュラーの念頭にも、このようなオーケストラ・サウンドがあったことは間違いないはずです。ぜひ、こうした作品を聴いて、大いにイメージづくりのヒントにしてください。

作品の調性

さて、ブルクミュラーの《雷雨》を見ていきましょう。調性は二短調。ベートーヴェンの《交響曲第9番》や、モーツアルトの《ピアノ協奏曲第20番》、歌劇《ドン・ジョヴァンニ》などに用いられた、きわめてエモーショナルで劇的な性格を持つ調性です。嵐が到来し去って

いく様を巧みに描いた小曲で、最後には二長調に転じます。この二長調(D-dur)は、ラテン語の神(Deus)の頭文字であることから、ヘンデルの《ハレルヤ・コーラス》など、神を賛美する作品でよく使われてきた調性で、嵐が去ったあと、あたかも神に感謝するかのような敬虔な感情を喚起します。ちなみに、調性は異なりますが、ベートーヴェンも、《交響曲第6番「田園」》の第5楽章で、「嵐のあととの喜びと感謝」を表現しました。

不穏な空気 (第1~8小節)

曲は、まず不穏なppの低音の蠢きの中、遠雷のようなオクターヴ・トレモロのsfが奏でられます。オーケストレーションすると弦楽器でしょうか……その中で、sfなど要所要所に若干管楽器が重ねられるかもしれません。この「< sf >」をどの程度施すかで、迫りつつある雷との距離感が変わります(譜例3)。

この距離感は、バス・ラインが異なる1回目(第2小節)と2回目(第4小節)でも変わるかもしれないし、繰り返し後もまた変わってくるかもしれない。様々な演出ができる

譜例3 ブルクミュラー《雷雨》 第1~2小節



譜例4 第6~8小節

るところです。また、細かく記譜された「< sf >」も、演奏次第で不穏な空気感を巧みに演出できます。細かい16分音符の動きは、すべてをはっきり弾いてしまうとバタバタしてしまうので、行ったり来たりしている音型は中心音を意識しましょう(譜例3、4の○印)。

1回目(「1.」)は嵐の到来の寸前まで予感させながらもいったんdim.で遠ざかり、2回目(「2.」)でいよいよ嵐となりますが、その端緒となる、緊迫した減七和音のただならぬニュアンス(第6小節)や、半音階反進行でのcresc. assai(第7小節)、増音程を含むメッセージ(「1.」)など、半音階や不協和音程のもつ特有のニュアンスに留意したいところです(譜例4)。

嵐の到来 (第9~16小節)

嵐が到来すると、2小節ごとにsfが来て、雷鳴を連想させます(譜例5)。

オーケストラもTuttiとなり、動き回る弦楽器だけでなく、管楽器の和音が重なってくるでしょう。「< sf >」には、ティンパニのトレモロを重ねてもいいかもしれません

譜例5 第9~12小節

せん。しかし、オーケストラ的な発想をしているピアノ曲では、脳内で鳴っているすべてのパートをピアノで音にするのは不可能で、実際にピアノ曲として記譜されるのは骨格だけになっていますから、2本の手では弾ききれなかったティンパニや管楽器のパートを背後に想定して弾くと、ぐんと広がりが出るはずです。ここで一瞬へ長調を経由しますが（第9～10小節）、前の小節に **f** = = があり、再び **f** と書かれていることからも、緊張感は緩めないほうがいいでしょう。嵐は、いよいよ緊迫感を増し、**ff con fuoco** のバスの半音階進行と減七和音の **sf**（第13～14小節）で最高潮に達し（譜例6）、不穏な半音階進行のユニゾンとともにいったん収まったのち再び襲来し、やがて **p** となり雷鳴が遠ざかってゆきます。第16小節以降は冒頭部分が回帰されるようですが、**pp** の冒頭に対し、ここでは **p** で、遠ざかりつつある嵐との距離感は冒頭よりも近くなります。

譜例6 第13～14小節

神への感謝……？（第20～29小節）

そして、*un poco più lento* の二長調に転じ、コラールを思わせる3声の敬虔な旋律が奏でられます（譜例7）。とりわけ美しいのは、下属調を感じさせる第22小節。音域的にホルンをイメージしているのではと思われ、牧歌的な情緒も漂わせます。何の楽器をイメージするかに

よって、求める音色の質感も変わりますから、表現の可能性がぐんと広がります。

そして、レチタティーヴォ的な単旋律は、チエロを思われるようですが、レチタティーヴォ的に書かれている時点でのどこに何らかの言葉が暗示されています（譜例8）。

譜例8 第24～27小節

神への感謝でしょうか、あるいは……？ アクセントを伴う **f** で開始され **p** で収束するのも意味深な記譜であり、音で何をどんな風に語るのか吟味したいところ。最後に **riten.** がありますが、そこだけでなく、レチタティーヴォ的な歌い回しは、拍を規定する要素が消えるので、全体的に自由になります。終わりの部分も、平穀が訪れたにもかかわらず、B♭で再び一瞬の痛みがよぎるよう意味深です（第26小節）。

*

今回の《雷雨》のように、具体的なタイトルを持つ作品の場合、作曲家がその対象を音楽でどのように描写しているか、イメージをふくらませながら観察していきます。その時に、いま見ている作品だけでなく、他の作曲家はそれをどんな風に描いたか、それを描くときにオーケストラではどんな書法がなされるか、など周辺にも目を向けられると、イメージがより確固たるものになり、表現の可能性がぐんと広がっていきます。自分が取り組む作品を一つのきっかけとして、そこから芽づる式に色々な作品を見聞きし、どんどん音楽世界を深めていきましょう。

譜例7 第20～23小節